

教育県・長野

——上田自由大学とその周辺——

山野晴雄

自由画教育と農民美術運動

自由画教育運動 養蚕地として名高い信州上田盆地のほぼ中央に位置する小県郡神川村（現在は上

田市に併合）は、南に千曲川が流れ、北には浅間山につづく烏帽子岳をのぞむ地にある。養蚕、とりわけ蚕種製造のさかんなこの村は、一九二〇年代（大正九、昭和四年）には、この地域での大正デモクラシー運動の一拠点をなしていた。この地は、山本鼎を中心とする自由画教育と農民美術運動の出発点となった土地であり、信濃自由大学（のち上田自由大学と改称）の発足の素地が形成されたところであった。

信州といえば、信濃教育会の存在とともに、教育県の名をほしそのままにしてきたが、大正期には、県内各地の小学校で児童の内発性を重んじた自由教育の実践がこころみられ、また各地域で民衆の自主的な学習活動がすすめられるなど、教育県の名に値するあたらしい教育・文化活動が展開された。神川村はそのような動きの中心となった地域であった。

自由画教育の歩みからみてみよう。この教育運動は、鈴木三重吉の雑誌『赤い鳥』による創作運動、北原白秋による唱歌教材批判などとともに、大正期芸術教育運動の一つをなすものであるが、それは画家山本鼎の提唱によるものであった。

東京美術学校を卒業して、石井相亭と美術雑誌『方寸』を刊行したり、若き芸術家たちのあつまりである「パンの会」に参加したりしたのち、ヨーロッパへ留学した山本は、フランスで油絵や版画の制作にしたがったのち、一九一六（大正五）年、デモクラシーの気運たかまる日本へ帰ってきた。帰国の途次ロシアに立ち寄り、その地で農民美術蒐集館と児童自由画展覧会をみたかれは、大きな示唆をうけ、「僕は千九百十六年の夏のモスクワ滞在〔中〕に、一つの使命を感じました。一つは児童の自由画奨励で、一つは、農民美術の建業であります」と、日本でその実施に使命感のようなものをもった『自由画教育』。そして、帰国後、かれは父が医院を開業していた神川村で自由画教育と農民美術の運動をはじめたのである。

山本鼎は、一九一八（大正七）年十二月、神川小学校で「児童自由画の奨励」と題する講演をおこなった。この講演をきっかけに自由画教育運動の組織化がはじまったが、この山本の提唱をうけとめたのは、かれのロシアの体験談に共鳴した神川村の富裕な畜種農家の二人の青年金井正・山越脩蔵と、神川小学校長の岡崎袈婆男であった。金井正は、児童のもつ可能性をひきだすところに教育の本質をみ、人間を鑄型にはめるような教育に対して批判的な考え方ももっていた。のちにかれは、『芸

術自由教育』（一九二二年六月号）誌上で、「人は誰でもいいものを有って居る。只そのいいものを導き出す細口が誰でもには与へられて居ない。又すべての人が自分のいいものに気付いて居るとは言へない。教育と云ふことはこのいいものを導き出す機会を与へること、銘々のもつて居るいいものに気付かせることだ」と、書いている。また岡崎袈婆男は、山本のロシアでの体験談に共鳴して、神川小学校で一クラスか二クラスに限って自由画を描かせる授業を担当の教師に行なわせていた。山本の講演は、この実験的な授業の成果にたつて、岡崎が依頼したものであった。

一九一九（大正八）年三月、山本の起意になる『児童自由画展覧会趣意書』が郡内外の教師に配布された。趣意書には、つぎのように書かれた。「従来の教導によりますと、児童は粗悪な印刷に付せられた大人の画（それも多くは下手な画家がそんざいに描いたもの）を模写する時間が、自然から直接に、形なり彩なりを汲み取る時間よりも多いのでありますが、これはいけない事と思ひます。何故ならば、例えば臨本に示された一本の下らない線が、一本の美しい、活きた樹木の線と同じ力を以て児童の頭に働きかけるからです。彼れ等はどんなものをも正直に摂取するのです。ですから、いぢけた臨本を与へれば、児童の眼と手は、其通りいぢけてしまひます。児童の眼を豊富な自然界へ誘へば、彼れ等の心と手は生きくとして来るのです」。

この趣意書にもとづくわが国最初の児童自由画展覧会は、一九一九年四月二十七、八の両日、神川小学校を会場として、小県郡二十四校・郡外二十校などから九千八百点の作品をあつめて開かれた。児童

が自分の眼でみたまま、感じたままを表現する自由画の展覧会は、教科書の絵を手本に模写させる方法をとってきた、それまでの臨本主義の図画教育に対する反逆であった。岡崎斐彦は、この展覧会について、「安価な臨本主義に⁴⁴泥んで形式的残骸品の羅列に止まる我国従来⁴⁵の単なる成績品展覧会に対しての、強い目覚めの第一矢である。併もこの重大な使命を帯びた展覧会の第一回が文化の中心地となりと称せらるる大都市に於てでなく、この信州の一小地方に生み出されたといふ事は更に一般の強い何物かを感じしめる」と述べた（『自由画展覧会と児童の本性』、『信州』六）。展覧会の模様は、『読売新聞』が日曜版付録の全面を提供するなどジャーナリズムを通じて紹介され、自由画教育は全国に急速にひろまった。七月には、運動の全国化をめざして、山本鼎・片上伸・岸辺福雄・金井正・山越脩蔵その他によって日本児童自由画協会が設立され、つづいて九月にはおなじ長野県の下伊那郡竜丘小学校で第二回展覧会が催された。さらに一九二〇（大正九年）十二月には、日本児童自由画協会は日本自由教育協会と改称され、それを機会に北原白秋・弘田竜太郎などが参加して、芸術教育運動の全国的な組織となり、翌年一月からは雑誌『芸術自由教育』が発行された。

この自由画教育の提唱には、既成の図画教育界からの反発もつよかった。たとえば国定本『新定画帳』の編者で東京高等師範学校訓導の阿部七五三吉は「小供は、臨本の模写だらうが、実物の写生だらうが共に自由な気持ちで描いて居る。それだのになぜ模写だけが不自由画なのか」と非難した。また、長野県内でも県学務課や信濃教育会・長野師範学校では、自由画教育は見向きもされなかった。

しかし、このような既成の図画教育界からの反対にもかかわらず、図画教育変革の動きは、信州から中央へおしよせ、全国にひろがっていったのである。

この時期には、長野県教育のなかに、大正デモクラシーのそれにふさわしく、児童を中心におき、その内発性を重んじた、創造的な教育が各地で実践された。埴科郡戸倉小学校・南安曇郡⁴⁶倭小学校などにおける赤羽玉郎・笠井三郎・中谷勲その他の青年教師たちによる信州白樺運動、長野師範学校付属小学校の杉崎⁴⁷路による研究学級の教育、松本女子師範学校付属小学校の川井清一郎による国定教科書を使用しない修身授業などは、いずれもそれを示す事例である。山本鼎の自由画教育運動も、また大正デモクラシーを背景にした自由教育の一つの表現であった。

農民美術運動

小県郡神川村から全国にひろまったもう一つの運動は農民美術運動である。この農民美術の具体化の作業は、児童自由画展覧会から半年おくれて、一九一九（大正八年）の秋から山本鼎と金井正・山越脩蔵の三人ではじめられた。十一月、神川村の各戸には、山本の起草した小冊子『農民美術建業之趣意』が配布された。そこには、「農民美術とは、農民の手によって作られた美術工芸品の事であつて、民族的若くは地方的な意匠——素朴な細工——作品の堅牢、等が其特長とせらるゝ」とされ、農民美術「建業の目的は、⁴⁸況く農民をして農務の余暇を好む処の美術的⁴⁹手工に投せしめて、各種の手工品を獲、是れを取流⁵⁰流布しつゝ、終に民族と時代とを代表するに足る PEASANT ART IN JAPAN を完成し、以て美術趣味と国力とに裨⁵¹益せんとするのである」と、その目

的が述べられていた。

ついで神川村の青年会、婦人会の幹部を小学校にあつめ、その建業の趣旨の説明とロシア農民の製作品の展覧会を催したが、村内の反響は意外と冷淡だった。「これはハア、大ていなもんでござせんぞ、あねいな立派なものが一と冬やそこらで出来やすいなあ」「とても百姓にはへエ、……絵心がねえ事には、つまり困難だわさ」「まったく、籠を編むとはわけが違ひやすわ、……百姓が美術品を作らうツうだからナイ」といった反応であった(『自由画教育』)。

神川小学校を会場にあてた講習会は、当初申込者一人というありさまであったが、十二月五日には希望者男女各四人で練習を開始した。男子はロシアなどの参考品を真似た「木片人形」や「白樺巻き」などの木工細工を主とし、女子は手縫刺繍を主とした。その後受講者はしだいにふえ、第一回の講習が終わった翌年三月には、男子七人、女子十四人となっていた。四月には、神川小学校を会場に講習会でつくられた千百五十三点の作品をあつめて第一回製作品展覧会が開催され、その後東京や大阪の百貨店で作品展示即売会が開かれ、その作品の多くが買い取られるという成功をおさめた。

この運動がはじまった時期、農村は戦後の不況にみまわれていた。それゆえ農民美術は、農閑期利用の副業として注目され、長野県や農商務省はこれに補助金をだして援助した。このため農民美術運動は急速に県内外の各地にひろがった。上田公園に建てられている山本鼎記念館には、指導・講習組合分布図として、県内五十二組合、県外三十一組合の名前がかかげられている。山本鼎は、旧友倉田

白羊を農民美術の指導者として招き、また二三(大正十二)年には大屋に日本農民美術研究所を建設して、みずからも指導に力をいれた。

この農民美術運動は、農閑期の農民に経済的安定を与えることと、それに伴う美を農民の生活のなから生みだそうとすることろみであった。そうしてそこには、文化を専門家の占有物からときはなち、それまで文化と遠い存在としかみられてこなかった地方の民衆の手にとりもどそうとする方向が示されていた。農民美術について、その援助者である山越脩蔵は、「吾々は、美術的活動が単に美術家の特産物でないことを平気で主張することが出来る。即ち誰れもが、真善美を認識することが出来るからである」と主張し(『村と産業美術』、『芸術自由教育』一九二二年六月号)、また農業講習生のひとり吉池勝は、「俺は農夫にも詩もあり美もあり感じもあるむしろ詩人文人と言はるる人と同じに強い感じを持って居ると思ふ。(中略)此産業的趣味ある有利な事業が社会に普及され俺達農夫が副業として利用したならば農家経済ばかりでなく百姓の品位が向上し、どれだけ百姓生活が意義あるものになるかわからない」と述べている(『農夫と農民美術』、同上)。

この農民美術は、民芸の研究で知られる柳宗悦からは、「外国好みの洋画家が、外国の農民美術から美しいと思ふものを選んで、日本の田舎の青年達に模倣させてある」もので、「田舎から必然に生まれ来る農民の作品ではなく」、「一種の異国趣味が附きまどつてある」と批判されるなど(『民と美』、いくつか批判をうけながらも、戦時体制におしながされて一九二九(昭和十四)年に日本農民

美術研究所が閉鎖されるまで、つづいた。

自由大学運動

上田自由大 学の発足

上田・小泉地方の農村青年たちが学習の場として上田自由大学をひらいたのは、一九二二（大正十）年十一月一日のことである。そのおこりは、小泉郡神川村の一青年山越脩蔵が、当時ようやく文明批評家として注目されはじめていた土田杏村を講師として哲学講習会を開催したことにあった。そうして、この哲学講習会から自由大学の設立にいたるこの地域の青年たちの文化活動の活発化は、経済的には、第一次大戦中の好況とそれにつづく経済情勢の激変に支えられたものであった。

上田・小泉地方の農家は一般に養蚕業の発展に支えられて比較的富裕な農家が多いが、神川村は「この付近でも割合に富んだ村の一つで、したがって一般に青年の知識が高かった」といわれる。この神川村の裕福な蚕種農家の青年である山越脩蔵は、同村の先輩でおなじく蚕種製造に従事していた金井正とともに、すでに述べたように、山本県を中心とする自由画教育と農民美術の運動に積極的にかかわっていたが、また青年団の普選運動にもかかわりあっていた。一九二〇（大正九年）四月、かれは、青年団の名において、「普通選挙は世の中をより良く住みやすくする第一歩であります。（中略）皆さんの御賛同を得て一日も早く此問題を解決して、改造の第一歩に入らうではありませんか」

と、普通選挙を要求する激文を、村民に配布するとともに、普選運動のための講演を、土田杏村に依頼した。

山越が在野の哲学者である土田杏村に講演を依頼したのは、かれが勉強好きな哲学青年であったことによるが、それは主として金井正の感化によるものであった。長野県の教育界には、この当時、教師たちによって信濃哲学会が結成されるなど西田哲学が風靡していたが、金井は、西田幾多郎をはじめ長野県に招く蔭の力となった人であった。かれは、一九一六（大正五）年八月に費用の大半を負担して小泉教育会の哲学講習会に西田幾多郎を招いたのである。この二人の青年について、のちに土田杏村は、「実業に熱心なのは言ふまでもないが、その忙しい家業のひまひまに実によく読書をしてゐる。その蔵書を見ても、ちょっとした学者の書齋ほど沢山の哲学書を備へ付けてゐる。何にせよ大したものですよ」と書いているが（『我國に於ける自由大学運動に就て』、『文化運動』一九二二年一月号）、山越は、このような哲学の研究のなかで、いつしか土田杏村に対しても関心をいだくようになっていたのである。

土田杏村の講演は、二〇（大正九年）九月、神川村の信濃国分寺客殿を会場に、哲学講習会として開かれた。土田は、このときのことを、こうかいている。「青年Y（山越脩蔵のこと—引用者）から、吾々農民が哲学の講義を聞きたいから来てくれと言ったので、私は農民と哲学と余りにその対照が面白いので、その秋出張することになりました。そして哲学の初歩手ほどきのようなものを致しました」

(「自由大学運動の意義」、『文化運動』一九二二年十月号)。

この哲学講習会は、聴講者の好評を博し、翌年二月には第二回の講習会が上田高等女学校を会場に開かれ、それを契機に小県哲学会が生まれた。この第一回と第二回の講習会のあいだ、二〇年十月に、小原郡連合青年団(二〇年二月発足)の官製的な体質にあきたらなかつた青年たちによつて、「人類ノ自己実現」と「現代日本ノ正当ナル改造」を目標にかかけた信濃黎明会がつくられている。黎明会にその名を借り、新人会にその綱領を借りたこの信濃黎明会には、山越脩蔵や猪坂直一をはじめ上田周辺の富裕な農家の青年たちがあつまつたが、かれらは、永井柳太郎・尾崎行雄などを講演に招いて、普選と軍縮の運動をすすめていった。それは、おなじ長野県の下伊那郡青年会の青年団自主化運動とは形態が異なるが、郡青の会員を中心とする自主化への動きとみることができる。一方での政治への参加と、他方での内面の充実とをはかりつつ、第二回講習会のさい、山越・金井・猪坂の三人の青年は、一夜、土田杏村と語り合う機会をもつた。このとき土田は、「当時文部省が肝入りでやつてゐた成人教育なるものの愚を指摘し、もっと系統的且つ組織的な民衆教育機関の必要と其の可能性を熱心に説いた(猪坂直一「土田さんと自由大学」、『土田杏村全集』月報『紫野より』八)。かれは、すでに前年に日本文化学院の設立を宣言し、個人雑誌『文化』(二〇年一月創刊)を刊行して、文化主義の立場からの新しい文化運動の実現に意欲を示していたが、聴講者の旺盛な学習意欲にふれて、その念願である「学問と実行と其中間に立つて男らしい文化運動」の実現に積極的な意欲を示したものとみられ

る。これに対して山越は、その土田のことばに感激しつゝ、「哲学を軸としての文化科学の講座を一ケ年五、六回宛開いてそれを長期に亘つて関連させる組織」をつくろうと決意した(草稿・信濃自由大学、『自由大学研究』二)。哲学講習会を終えるとかれは、信濃黎明会の活動を通して知り合った猪坂に協力を求め、さらに金井の助言をも仰ぎながら民衆教育機関の設立に着手していった。そのさい名称を自由大学と名づけたが、それは青年たちの提案によるものであつた。

土田杏村は、哲学講習会を終えて京都に帰ると、「僕は何処までもアカデミックの学風を嫌ふので、あゝして一般の民衆さへ哲学化して来たら、アカデミイの連中が却て覚醒せられて了ふだらう。(中略)文化運動の方も大いに信頼して居ます。新しい人達のまどゝろをつくつて下さい。ガサガサした労働運動などにはうんざりして了ふのです」と、山越あてに書き送っている。この手紙にみられるように、かれは既存のアカデミズムはもちろん、既成の社会主義運動や労働運動にもあきたらない気持をいだいていた。それゆゑ自由大学へよせた期待は大きなものがあつた。土田はみずから「信濃自由大学趣意書」を起草している。その趣意書は、二一(大正十)年七月、一般に公開されたが、設立の趣旨を、「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般民衆が産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受ける機会を得んがために、総旨長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と述べている。それは、農閑期にひらかれる「民衆が労働しつゝ、生涯学ぶ民衆大学」であつた。

学期	開講年月日	日数	講師	師	講	座	聴講者数	会場
I	1921.11.1	7	恒藤 恭	藤 恭	法律哲学		56	上田市横町神職合議所
	1921.12.1	6	タカクラ・テル	出 隆	文学論		68	同上
	1922.1.22	7	田 杏	田 杏	哲学史		38	同上
	1922.2.14	4	土田 杏	土田 杏	哲学概論		58	同上
	1922.3.26	2	世良 寿男	世良 寿男	倫理学		35	同上
II	1922.4.2	5	大脇 義一	大脇 義一	心理学		31	同上
	1922.10.14	5	土田 杏	土田 杏	哲学概論		44	同上
	1922.11.1	5	恒藤 恭	恒藤 恭	法律哲学		47	同上
	1922.12.5	5	タカクラ・テル	タカクラ・テル	文学論		63	同上
	1923.2.5	5	山口 正太郎	山口 正太郎	哲学史		50	同上
III	1923.3.9	5	山 正太郎	山 正太郎	経済学		34	同上
	1923.4.11	5	佐野 勝也	佐野 勝也	宗教学		34	同上
	1923.11.5	6	中田 邦造	中田 邦造	哲学概論			同上
	1923.11.12	5	山口 正太郎	山口 正太郎	経済思想史			同上
	1923.12.1	5	タカクラ・テル	タカクラ・テル	文学論			同上
IV	1924.3.22	5	出 隆	出 隆	哲学史			同上
	1924.3.27	5	世良 寿男	世良 寿男	倫理学			同上
	1924.4.1	5	佐竹 勝也	佐竹 勝也	宗教学			同上
	1924.10.13	5	新明 正道	新明 正道	社会学(概論)			同上
	1924.11.3	5	今中 次郎	今中 次郎	政治学(国家論)			同上
V	1924.11.21	5	金子 大栄	金子 大栄	仏教概論			同上
	1924.12.10	5	タカクラ・テル	タカクラ・テル	文学論			同上
	1925.3.21	5	波多野 鼎	波多野 鼎	社会思想史			同上
	1925.3.26	5	佐野 哲雄	佐野 哲雄	哲学概論			同上
	1925.11.1	5	新明 正道	新明 正道	社会学	21		同上
再建 I	1925.12.1	5	タカクラ・テル	タカクラ・テル	文学論(仏文学)	30		同上
	1926.1.		谷川 徹三	谷川 徹三	哲学史			同上
	1926.2.		中子 邦造	中子 邦造	哲学(西田哲学)			同上
	1926.3.		金子 大栄	金子 大栄	仏教概論			同上
	1926.3.22	5	松沢 兼人	松沢 兼人	社会政策			同上
再建 II	1928.3.14	3	タカクラ・テル	タカクラ・テル	日本文学研究	60	上田 図書館	
	1928.11.19	3	三木 清	三木 清	哲学論	25	上田市海野町公会堂	
再建 III	1929.12.6	4	タカクラ・テル	タカクラ・テル	日本文学研究	28	同上	
	1930.1.24	3	安田 徳太郎	安田 徳太郎	精神分析学	44	同上	

第1章 上田自由大学講座一覽

(拙稿「自由大学の講義内容について」『自由大学研究』第2号(1974年)による)

外形が華麗であり、宏大であって、しかも内容が平疎であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあって、われわれを失望させ、憤慨させる場合が尠くないのは、まことに残念なことと思ひます。それからみると、信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとって生まれ出て、謙遜に、質実に、みづからの存在と生長とをはじめたといふことは、それにたづさはる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか」と、講師



上田自由大学の会場となつた上田市横町神職合議所

学習活動の展開

自由大学の創設期の会場となつた上田市横町の神職合議所は、いまも上田市の下町にのこっている。五十年余の歳月は、それを映画館にかえたが、その神職合議所は、「広さ四十畳ばかりの大広間だが、畳はもうホロホロになって芯が出て居り、建付の悪い戸口の隙からは寒い風が吹き込んで来る」という状態であり、黒板や机も近所から借りあつめるというように、貧弱な施設のなかで、自由大学の講義は開始された。

第一回の講師となつた恒藤恭は、講義を終えて京都に帰ると、「信濃自由大学聴講者諸君」と題する一文を自由大学の運営者たちに書き送り、そのなかで、「現在の社会には、

講義 聴講生	上田自由大学聴講者職業別調 (第2期講座)										聴講者 延総計
	農	業	教	官	医	学	其	合	計	計	
哲学概論	17	14	5	1	0	7	44	47	50	34	272
法哲学	23	12	5	2	0	5	47	47	50	34	272
文学論	26	23	7	2	2	3	63	63	50	34	272
哲学史	24	17	2	1	2	4	50	50	50	34	272
経済学	22	6	1	2	0	3	34	34	50	34	272
宗教学	16	9	1	2	3	3	34	34	50	34	272
延総計	128	81	21	10	7	25	272	272	272	272	272

第2表 上田自由大学の趣旨及内容! (1923年)による)
(信濃自由大学)

としての感激を語っている。

講師には、この法律哲学の恒藤恭をはじめ、哲学概論の土田杏村、文学論のタカクラ・テル(高倉輝)、哲学史の出隆、社会学の新明正道、政治学の今中次麿など、学問の分野でも新しい気運を代表する人びとが招かれた。その講義内容は、どの講師も普通の大学の講義と同様なものを講義していたと考えられており、現存するノートによればかなり高度であったことが知られる。聴講者がどの程度講義内容を理解していたかは不明であるが、今中次麿は「私の一番嬉しいのは私が学校に於けると同じい自由を与えられ同一程度の講義をしたにも係はず御諒解下さった御様子を見出したことあります」と述べている(馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」)。

聴講者は、一講座あたり四十名で、比較的富裕な中農層の農村青年と小学校の教員が多かったが、なかには少数ながら芸妓や女教師など女性の参加もみられた。自由大学では、聴講者と講師とは学問への情熱によってむすばれ、たとえば、恒藤恭は「寒さにひきまわった空気の中に、静けさがみち渡り、あかるくたのしげに輝く電燈の下に、聴講の方々の熱のこもった瞳をみひらいて、じつと聴講して下さるのを眺めながら、私は時間のうつるのを気付かないでしや

べりました」と語り(信濃自由大学聴講者諸君!)、出隆は「毎晩三時間あまりはみつちり講義をすることができたし、またその講義の前後にも、社務所に泊りこみの熱心な青年もあって、いろいろ話し合ったが、みんな自分の気持ちをむきだしに話す真剣で実直な人々だった」と回想している(「出隆自伝」)。

この自由大学のところみは、各地に反響をよび、長野県・新潟県その他の地方都市や農村に波及していった。長野県内では飯田に信南自由大学(のち伊那自由大学と改称)、松本に松本自由大学がひらかれ、地域民衆の学習運動としての足跡を残していった。自由大学が各地に設立されるのに伴ない、一九二四(大正十三年)八月には各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が上田につくられ、二五(大正十四)年一月からは猪坂直一が発行兼編集者となって『自由大学雑誌』が刊行された。

自由大学関係の資料は、現在、その多くが上田市立図書館に保存されている。そのなかで、『自由大学雑誌』に掲載された土田杏村の「自由大学の危機」と題する一文は、この時期、成人教育講座というかたちで「文部省が直接に成人教育機関を経営」してきたことに鋭い批判を加えている。第一次大戦後の社会運動のたかまりに対抗して、国家のがわからは国民教化体制の再編成が一九二〇年代を通じてすすめられていったが、文部省の成人教育講座は、この国民の思想「善導」をになう重要な柱の一つであり、二三(大正十二年)以降全国各地に開設されていったものであった。土田杏村は、これに対して、「教育とさへ言へば何でも文部省が自分でやるものと思ふのが抑もの間違ひだ。(中略)

我々は断じて成人教育を、文部省や内務省の手に渡してはならない」と、国家の社会教育による国民の思想“善導”を批判したのである。また、運営者のひとり猪坂直一は、今日でもなお木崎湖畔で開かれている信濃木崎夏期大学などの夏期大学に対して、「所謂夏季大学なるものは、軽井沢とか木崎湖畔とかの避暑地に於て有閑階級のために開かれる娯楽半分の教育である。(中略)教育は娯楽ではない。魂へ糧^{かた}を供給するものである」と批判している。これに対して、自由大学は民衆の自発的な学習運動であり、「人間の判断や意志活動を自律的にする」教育をめざすものであった。それは、上田杏村が『信濃自由大学の趣旨及内容』のなかの一文「自由大学に就て」において、「すべての社会的不平等は、教育の不平等を根本の原因として運命的に決定せられ、其の結果の派生するところ止まることを知らないのである」と述べ、「教養のデモクラシー」を要求したように、自己教育をあらゆる活動の基礎におこそうとする運動にはかならなかった。

この上田ではしまった自由大学運動は、県内外の各地に波及してゆくところから、さまざまな運営上の困難に直面するようになった。そのなかで、聴講者の減少に伴う財政上の困難は、自由大学の経営に大きな影響をあたえた。その創設当初から、「経費の全部を会員の持ち寄る小額の会費によって支弁するのを原則」とした自由大学にとって、平均四十名にすぎない聴講者の聴講料(一講座三円)のなかから講師謝礼(一講座八十円ないし百円)その他の経費をのぞくと経営はけっして容易ではなかった。不足分は山越脩蔵その他の青年たちの寄付金や、タカクラ・テルが上田付近の町村青年団で講

演して得た謝礼などでおぎなったりした。だが、この地域の養蚕業の停滞と不安定の傾向の継続に伴って、自由大学の聴講料は聴講者にとって負担になり、聴講者は減少しはじめたのである。青木猪一郎は、「月々参円と云ふ大枚の聴講料が仲々大袈裟だ」「自由大学で高倉さんの『ドストエフスキイの研究』がある筈だが金が無いので中止。悲しい事だ」と日記に書いている。また、自由大学の講義内容が哲学・文学など人文科学系の学問にかたよっていることへの批判が生じてきたことも、聴講者の減少に関係したと思われる。そうした状況にくわえて、自由大学の講師の渡欧留学による講師難、上田杏村の病気の悪化、タカクラ・テルと猪坂直一とのあいだの亀裂などの問題がかさなり、上田自由大学は、一九二六(天正十五)年四月以降、ついに講座の中断を余儀なくされた。

自由大学の再建

一九二〇年代後半を通じて継続した農村不況は、一九三〇(昭和五)年にはじまる大恐慌によっていっそう深刻化した。ことに養蚕十製糸業を主要産業とする上田・小県地方では、繭糸師の暴落によって、農民は「如何ナル最大級ノ文字ヲ以テシテモ到底形容スルコトノ出来ナイ困窮ノドン底ニ呻吟シツ、アル」(昭和五年第五十三回長野県連帯常員会議事日誌)といわれるような深刻な状況を生じた。一九二八(昭和三)年四月、タカクラ・テルの指導のもとに上田小農民組合連合会が組織され、深刻な不況を反映して、尖鋭な農民運動が展開された。一方、この地域の青年たちの多くは、不況下のきびしい現実に農村受難の想念をいだき、ニヒリズムをはらみながらも“急進化”し、状況打破の方途をさぐっていた。それとともに小県郡連合青年団も“急進化”

し、長野県連合青年団のうごきと歩調をあわせて、青年訓練所廃止運動や電灯料値下げ運動を激しく展開していった。

上田自由大学は、このような状況のもとで、二八（昭和三）年三月に再建される。一九二七（昭和二）年以降の深刻化した農村不況のなかで、状況打破にうごきはしめた青年たちが、その社会的実践の「思想的な根拠を求めて」自由大学を再建したのである。その運営の担い手となったのは、猪坂直一・山越脩蔵にかわって、小県郡連合青年団の幹部である堀込義雄・山浦国久その他の青年たちであり、それに全面的に協力していったのがタカクラ・テルであった。同年二月にだされた自由大学再建をよびかける手紙には、「既に御承知の事と存じますが信濃自由大学は別紙趣意書に依って設立せられ四年間経営が続けられてきました。その間私共はその恩恵を受けて大いに啓発されるどころがあったのであります。然るに種々の支障から休まねばならなくなって二年間開講を見ることができませんでした。ところが地方文化開拓の為には唯一の機関たるこの大学の閉鎖は地方民衆の此上もない不幸損失であるといふのでその復活を希望する人達が少くありません。私共は是等の有志諸君と共にこの有意義な文化運動機関の再興を熱望してやまないであります」と書かれた。

講座は、二八年三月のタカクラ・テル「日本文学研究」にはしまり、三〇年一月の安田徳太郎「精神分析学」まで四回開講されたにすぎなかった。しかし、自由大学は、農民運動ともむすびつきつつ講座を組織していったのであり、この時期には、上小農民組合連合会の井沢謙や井沢国人などタカク

ラ・テルとともに農民運動にかかわっていた貧農層の青年たちも参加するようになり、青年たちは「自由大学に、知識より分析を多く要求するようになったといわれる。それは、自由大学が社会変革のための学習運動という性格をつよめていったことを示唆している。

けれども、農業恐慌が深刻化し生活難がつづくなかでは、一講座二円五十銭ないし二円五十銭の聴講料をだして講義をきく青年たちは少なかった。それは、自由大学の経営を破綻させ、講座の継続を困難にした。タカクラはこう回想している。「自由大学の運動は、昭和四、五年頃から次第に衰えて来た。その第一の原因は農村の激しい不況であった。養蚕の中心地帯である長野県の農村は、繭値の下落によって、特別の苦境に落ちた。すべての農家がひどい負債のため実際餓死のすぐ一歩手前に追いやられ、各地に小作争議その他の闘争が頻発した。月々二円乃至三円の会費お出して講義の聞ける農民が殆ど無くなった。そこで、会員が次第に少なくなって、としいて経費の維持が出来なくなった。私の講義だけが最後まで聴講者が多かったので、初めその会費おほかの費用に廻したりしていろいろ工面おしていたが、それもしまいに続かなくなった」（『自由大学運動の経過とその意義』、『教育』一九三七年九月号）。

また、自由大学の継続が困難になったのは、講師としてまた講師の斡旋に努力するなど自由大学を支えていたタカクラが、しだいに活動の重点を農民運動の方にうつしていったことも大きな要因であった。一九三二（昭和六）年四月に会員に送付された通知には、「今冬十一、二月の候においては、是

非とも開講いたしたいと念じております」と書かれたが、しかし実際には、すでに講座がひらける状況にはなかった。自由大学の大きな柱であったタカクラ・テルは、三二（昭和六）年二月にはしまった西塩田村小作争議にかかわり、自由大学運動から遠ざかっていった。こうしてほぼ十年にわたる上田自由大学の学習運動は、一九三二年に幕を閉じたのである。

タカクラ・テルと地域民衆

青年団活動

上田市外別所温泉の常楽寺は、ふかい木立ちを背負って、塩田平をのぞむ地にある。この天台宗の古刹は、今日でこそ静寂にすましかえっているが、一九二〇年代には、この地域の青年男女のつどい場所となっていた。

この本堂は、この地域の青年団の講習会や夏季婦人大学の会場として使われた。ことに頻繁に本堂を使ったのは、小県郡連合青年団の青年たちであった。青年団といえは、日露戦争を契機として国家による統制がつよめられ、国家主義化していった組織である。小県郡の連合青年団も発足当初は官製的な体質をもっていたが、デモクラシーの気運のもとで、青年たちは自主化へのうごきをおこし、あたらしい思想の撰取に意欲を示すようになっていった。そうした青年たちが講師をよんで話をきき、意見をたなかわせる場として選ばれたのが、常楽寺であった。東大の心理学科をでたばかりの若い住職半田孝海は、これに全面的に協力し、本堂を会場に提供した。この青年団の幹部講習会には、

一九三二（天正十二）年以降、轅山政道・河合栄治郎・平野義太郎、さらに常楽寺のはなれに住んでいたタカクラ・テルらが、あいついで講師として招かれた。常楽寺での三泊四日の講習会は、青年団官製化のなかで失われていった若衆組の復活を思わせて、青年たちにとってはたのしい経験であったという（鹿野政直「絹の道と青春」、朝日新聞社編『思想史を歩く下巻』。ここはまた信州夏季婦人大学の会場となり、有馬頼憲や市川房枝などが講師としてやってきた。こうしてかつての学問寺は、青年男女の学習の場となった。だが、青年たちは、講習会で講演をきいたり討論したりするだけでは満足しなかった。かれらは、一九一〇年代の末から二〇年代にかけて、いつせいに「時報」というメディアをつくりだして、そのなかでみずからの声をあげはじめた。

「時報」刊行の先頭をきったのは塩尻村の『塩尻時報』（一九一九年二月創刊）であったが、殿城村の青年会から発刊された『殿城』（一九二七年五月一日）は、みずからを「村の新聞」とよび、「夙に芽萌く可くして木の間土に潜んでゐた私共の伸びやうとする力は本当に強いものでした。（中略）資本家や為政者に左右されてある今日の新聞には私達の何うにもされぬ不満や潜勢力があります。そんな不満さが塵程もない此村の新聞を之れから育て下さい」と訴えて刊行された。「時報」とは、原則として月一回発行された一種の町村報である。その意味でそれは自治体の機関紙であるが、実質的には青年団がその仕事を担当し、発足当初のなかば官報的な性格をしたに脱却して、かれら自身の思想を表白する場としていったのである。上田市立博物館には、今日、各町村で刊行された「時報」

が集められているが、上田・小県地方三十五市町村のうち、「時報」を刊行したのは三十町村におよんでいる。この事実は、この地域の青年たちが、第一次大戦の終了とともに顕在化した社会の閉塞状況のなかで、自分たちの生活の前途を模索し、その鬱積した想念を表現せずにはおかれなかったことを示すものであり、また、村落支配層による堅固な村の秩序のなかで、自立への欲求がいかに強かったかをものたるものであった。

この地域の青年たちは、青年団活動のなかで、この常楽寺での学習や「時報」の刊行にみられる独自の文化活動を展開したのである。

常楽寺正面の坂道をくだったところに、石垣をめぐらした閑静な住宅がある。ここに
タカクラ・
テルの活動 は文学者のタカクラ・テルとその家族が住んでいた。

タカクラがこの地へきたのは、上田自由大学の講師として招かれたのが、きっかけとなっている。かれは、一九二二（大正十）年、ロシア文学の熱心な研究のため追われるように京都大学の嘱託をやめたとき、京都大学のロシア語教室で知り合った土田杏村にもとめられて、自由大学の運動に参加したのである。すでにそのころ、かれは、戯曲三部作「女人禁殺」などの作品を発表して、作家としての道を歩もうとしていた。ところが、そのとき、文壇の中心にいた作家たちの圧力によって作品の発表を出版社からボイコットされ、経済的にも困窮をしいられることとなった。そのなかで、かれは文壇的な関心をいっさいすて、一九二三（大正十二）年、この地に移り住んだのである。

自由大学でのかれの講義は、終始、もっとも人気があった。自由大学の聴講者であった人びとは、いずれも、タカクラの話がいちばん印象ぶかく面白かった、と語っている。このことは、当時の聴講者の日記からもうかがうことができる。たとえば、青木猪一郎は「ゴリゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かった。始めての日のあの向きでは何んな事になるかと打案じられたのに」と書き、中沢鎌太は「中々愉快であった。高倉先生の話は実に面白く且分り易い」と書き残している。こうしてタカクラは、ここで、創作活動をすすめつつ、自由大学で講義したり、その運営の相談にのったりして、この運動に積極的にかかわっていた。また各地の青年団から依頼があれば講演に出かけ、その謝礼を自由大学の費用にあてたりした。山国である信州の、その谷をわけ峠をこえて、大抵の村へ行ったという。

タカクラの家へはこの地域の青年たちがよくたずねてきた。豊巖村の文学好きの少女であった三井広子は、女学校時代からタカクラの作品を読み、自由大学に出席し、女子青年団のために講演を依頼したところから、タカクラの家へ出入りするようになった。神川村の「時報」の編集にたずさわるかたわら自由大学に出席していた山辺聖は、よく夜を明かして雑談をしたという。また浦里村の農民組合の活動家であった井沢謙は、「タカクラさんのところへよく遊びにいった。先生のもとへ送られてくる本のなかから、いくつかもらったりしたです」と語っている。

タカクラは、このように農村青年たちと接触をふかめてゆくなかで、しだいに農民運動にかかわ

てゆくこととなるが、のちにかれは、そのころのことをつぎのように書いている。「わたしは、ロシア文学・フランス文学・イタリア文学などの代表的な作者の作品を具体的に紹介して、文学ぜんたいにたいする見とおしをそれら『自由大学会員―引用者』の勤労者にもってもらおうと思って、始めました。ところが、そうしてやっけていくうちに、それらにたいする会員たちの驚くような熱意に、すっかり圧倒されると同時に、会員たちは別のもっと熱烈な要求をもっていることを、わたし自身がひしひしと感じないわけにいかなくなりました。ここから、わたしの考え方・立場・行動がしだいに大きく変わっていきました。つまり、しだいにしんげんに共産主義者としての道があることになりました。具体的には、しだいに、労働者・農民といっしょに労働争議や小作争議をたたかうようになり、いっしょにその理論を学習するようになり、いっしょにその組織活動に全力をあげるようになりました。こうして、ナガノ県の労働者や農民がわたしの生涯のいちばんたいせつな先生になりました。(中略)その先生とわたしを結びつけたものが自由大学だったんです」(山野晴雄編『伊那自由大学関係書簡』の序文)。

こうしてタカクラは、深刻化する農村不況のなかで、山本宣治や次男次郎の死をむかえながら、一九二八(昭和三)年四月の上小農民組合連合会の結成に努力し、また三一(昭和六)年から三二(昭和七)年にかけての、長野県三天小作争議の一つといわれる西塩田村小作争議を指導し、その一方で、地方農民の生活や生き方を「百姓の歌」や「狼」などの作品のなかに描いていった。かれは「北信左

翼論壇の暁将」として官憲のきびしい監視をうけたが、そのタカクラの活動を支えたのは、この地域の青年たちであった。タカクラは、一九三三(昭和八)年の二・四事件とよばれる弾圧で信州を追われるまで、ここで地域民衆のなかに根をおろしながら活動をつづけた。

このタカクラ・テルの歩みは、地域民衆とむすびつきつ自己変革をとげていった、この時代の知識人の一つの軌跡を示している。いま安楽寺の境域に再建されている山本宣治の碑は、この地に足跡をのこした山宣とともに、この長野県の農村に骨を埋めるつもりで土着したタカクラの活動を伝える記念碑ともなっている。

これまで、教育県といわれる長野県で、大正デモクラシーの時期に、地域民衆と教育とのかかわりがどんなものであったかを、上田・小県地方の場合について述べてきた。

よく長野県は教育県といわれ、その一つの証拠として、学制頒布(明治五年)の初期で小学校就学率が全国的にみて高かったことがあげられる。けれども、それは表面のことであって、信州教育が評価されたのは、長野県が日本の急速な近代化の推進にみあう人材をつくりあげる教育体制をいち早くつくりあげたことにあった。いいかえれば、文部省の教育行政を先取りしてきたところにある。大正デモクラシーの時期には、長野県は自由教育の拠点の一つとなったが、この自由教育への国家や県のがわからの圧迫に対して、長野県教育に大きな影響力をもっていた信濃教育会は、一九二四(大正十三年)の川井訓導事件をのぞいては、ほとんど抵抗することはなかった。

そうして一九三三（昭和八）年の“教員赤化事件”として知られる二・四事件を契機に、国家主義教育を積極的におしすすめていったのである。信州教育の本流はそのようなものであった。

このようにみえてくると、自由画教育や自由大学運動にみられる上田・小県地方のうごきは、信州教育のいま一つの歴史を示しているといえよう。そこにみる歴史は、地域民衆に支えられながら、人間を鑄型にはめるような方向からの脱皮をめざした、いま一つの教育の流れがあったことをものごといている。この地域は大正デモクラシーが活発に運動化されていった土地として注目されつつあるが（鹿野政直『大正デモクラシー』、そこには、これまでみてきたような教育に深い関わりをもつ、地域に根ざした文化創造へのうごきがあったのである。

【参考文献】

猪坂直一『回想・枯れた二枝』 上田市民文化懇話会、一九六七年

宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』 法政大学出版会、一九六八年

小崎軍司『山本鼎』 山本鼎記念館友の会、一九六九年

長野県編『長野県政史』第三巻、長野県、一九七二年

鹿野政直『大正デモクラシーの底流』 日本放送出版会、一九七三年

佐久教育科学研究会編『長野県教育のあゆみ』 労働旬報社、一九七五年

山野晴雄「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動―上田自由大学を中心として―」（『季刊現代史』第八号）